

11月初旬は暑い日が続いたかと思えば、急に冷え込んで、だんだんと秋の丁度いい季節が無くなっているなあ。と感じる今日この頃です(^_ ^)気づけば今年も残り1ヶ月を切りました！冷え込む毎日ですが、皆様体調を崩さないよう良いお年をお過ごしください(*^_^*)今回は猫ちゃんの膀胱炎についてです。



猫の膀胱炎とは？

膀胱は体の中でおしっこをためる役割をしています。その膀胱に何らかの原因で炎症が起こり、おしっこをためたり、排泄をしたりといった膀胱の機能に支障が生じてしまう疾患です。

急速に発症し病気の進み方が速い場合を急性膀胱炎、経過が長い場合を慢性膀胱炎と言います。

膀胱炎の症状

膀胱炎になると、

- 何度もトイレに行く(頻尿)、少ししか尿が出ない
- 排尿が終わったのに排尿姿勢を続ける(残尿感)
- 排尿時に痛そうに鳴く(排尿痛)
- トイレ以外の場所でおしっこをしてしまう
- 赤い尿(血尿)が出る、尿の匂いが強い
- 陰部を舐めたり、気にするような素振りをする

等の症状が見られます。特に急性膀胱炎の場合は顕著です。



ウニヤーン！
(何だかお腹が痛いよう)

おしっこが我慢でき
ない...



おしっこがいつもより臭い？

膀胱炎の原因

原因が一つだけでは無いこともあるよ！

尿路感染症 (細菌性)

- 陰部などに存在する細菌が膀胱内に侵入することで感染し発症する
- まれに真菌(カビ)や、マイコプラズマ、クラミジア、ウイルス感染が原因になることも

尿結石

- ストルバイト結晶(リン酸マグネシウムアンモニウム)、シュウ酸カルシウム結晶などの尿結石が膀胱内を傷つけてしまうことで発症する
- 放っておくと尿道閉塞になることも

膀胱炎の原因になるような 基礎疾患

- 先天性の異常、慢性腎臓病、糖尿病、あるいは腫瘍など

特発性膀胱炎

- 検査上、上記の異常が見つからない場合、ストレスが主な原因ではないかと言われています
- 猫ちゃんの下部尿路疾患で比較的多く見られます

膀胱炎の診断・治療

まず、後腹部の触診をし、膀胱の大きさ・硬さ・痛み等の確認をし、膀胱内におしっこがたまっている状態であれば、採尿をして尿検査を行います。おしっこが全くたまっていない場合、おしっこがたまるまで待合室で待機していただくこともあります。

尿検査

- ・尿中に細菌や尿結石(結晶)が無いのか、PH等の数値を確認します。

レントゲン検査

- ・尿結石や基礎疾患が疑わしい場合に確認します。
- ・大きい結石がある場合詳細に確認できます。

エコー検査

- ・レントゲン検査と同様、尿結石や基礎疾患が疑わしい場合に確認します。

検査が終わったら・・・

- ・**細菌性膀胱炎**と診断の場合は、まずは抗菌薬の内服によって治療します。薬を飲み終わる頃にもう一度尿検査をして膀胱から細菌がいなくなれば治療は終了になります。
- ・**尿結石**の場合は、尿結石の予防や再発防止の療法食を処方します。また、膀胱内の結石が大きい場合は手術で摘出することもあります。一度結石が出来た猫ちゃんは出来やすい体質なので、療法食以外の食べ物は与えないように気を付けましょう。
- ・**基礎疾患**に関しては、その基礎疾患に対しての治療を行います。
- ・**特発性膀胱炎**の場合は、猫ちゃんのストレスの原因となっているものを改善してあげるのが治療になります。例えば、トイレに不満を持っている(トイレが小さい、トイレ・砂の形状が気に入らない、トイレの数が少ない)、運動不足(遊んでほしい)、環境が変わった(引っ越しや家族が増えた)など、他にも若齢～中年期の子や、肥満の猫ちゃんになりやすいと言われています。また、再発防止にストレス緩和を目的に作られた療法食を使用します。



12月から院長に就任しました佐々木です。猫の膀胱炎はほとんどによく遭遇する疾患ですが、多くを占めるのは「特発性膀胱炎」です。この【特発性(トクハツセイ) = 特別な原因がないのに発症する】という言葉は、語感が似ているために【突発性(トツパツセイ) = 突然発症する】と間違えることがよくあるようです。そういえば獣医療で【突発性】の付く病気あったけーと思って調べたら、突発性後天性網膜変性症候群がありました！ないわけじゃないけどすごく少ないみたいですね。それはさておき、一番気を付けておいて欲しいことは「雄猫の膀胱炎症状を見たらすぐに病院へ」です。なぜなら、膀胱炎だけで亡くなることはまずないんですが、雄猫の膀胱炎は尿道閉塞を起こして数日で亡くなってしまうことがあるからです。できるだけ早く気付いてあげたいものです。

